



Title	ベルクソンの「拡がり」について
Author(s)	中村, 雅之
Citation	年報人間科学. 1985, 6, p. 97-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6428
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八五年二月〕
『年報人間科学』第六号 九七頁—一一一頁

ベルクソンの「拡がり」について

申
村
雅
之

ベルクソンの「拡がり」について

その副題—心身関係についての試論—が示すように、ベルクソンの『物質と記憶』は心身問題の克服を大きな目途として書かれた書物である。彼の見解は主として第四章で示されるのだが、そこでは「緊張 tension」および「拡がり extension」という考え方の導入によって、心身関係にまつわる難問を乗り越えようとする試みが語られている。本論はこの「拡がり」に的を絞り、ベルクソンがこの術語によって何を語るうとしたかを、おもに行動の側面から解明しようとするものである。

ベルクソンの「拡がり」とは、質を持つた具体的な延長であるとひとまず言うことができる。それは、デカルトの語る延長や幾何学の空間と違って等質的なものではなく、これらから明確に区別されるのである。しかし、彼は同時に「拡がりの様々な程度」についても語っている。これは何を意味しているのだろうか。事物の長さや幅が増減すると語ることには、容易に見て取れる明確な意味がある。しかし、ベルクソンの「拡がり」はけつしてそのような延長に関する個々の規定ではなく、事物の（ただし異質的な）延長そのものなのである。とすれば、事物の個別的な空間的規定ではなく、その空間性そのものの程度を語ることは、これに対応するどのような事態

を考えることもできぬゆえに、たんなる無意味な表現にすぎないとも思える。しかし、「拡がり」の意味を我々の身体が周囲の事物に働きかけるしかた、すなわち行動の様態と解すれば、その「程度」を語ることはけつして無意味ではないと考えられる。この解釈を提示することができが本論の目的である。

以下、ベルクソンが「拡がり」について語るところを概観し(一)、次いで拡がりの程度が行動の様々な様態として解釈されることを示し(二)、最後に彼の知覚論を通じて、「拡がり」についての統一的理解がえられるなどを述べる(三)。

「拡がり」という術語が最初に登場するのは『物質と記憶』(以下『記憶』)においてである。先に触れたように、この術語が導入されたのは「心身結合の問題」(M. M., 200)を説明するためであった。ベルクソンによれば、心身問題の困難は我々の悟性が延長と非延長の間に設ける対立に由来する。一方に質を欠いた延長をその本性とする物質、他方に諸性質をになう非延長的な感覚を対置する

時、物質と意識的知覚、身体と精神の間には共通なものは何も見出されなくなる。」のような形で問題を提出する限り、心身関係はいつまでも理解されえないだろう。悟性が設けるこの人為的な対立を乗り越え、「延長と非延長との可能な接近」(ibid., 201)を示唆するのが「拡がり」なのである。『記憶』では拡がりの特性として次の二つがあげられている。拡がりは、(1)等質空間とは区別される「具体的延長」(ibid., 244)や(2)「物質的延長」(ibid., 202)であり、(1)程度を持つ。

第一の論点から見て行こう。具体的延長としての拡がりは、等質空間と常に対比され区別されるとして浮彫りにされる。ベルクソンは「空間」を等質的で無限に分割可能だ、また無限性を持った、悟性の作り出した抽象的概念または図式であるとした。これの規定は「空間、すなわち等質的かつ空虚な、無限でありかつ無限に分割し得る、⁽¹⁾ ふるような分割の様態にも無差別に適合する場 milieu」(E. C., 157) ところ一節に集約されている。具体的延長としての拡がりは、これの一つ一つの規定と対照的な性質を持っていられる。すなわち、それは異質的で不可分であり、有限で、具体的知覚のうちに与えられたものなのである。言い換えれば、具体的延長とは知覚に与えられた内容のことであり、「感覚性質の多様」(M. M., 244)に他ならない。「拡がりは知覚の最も明白な性質である」(M. M., 276)。物質の本性であるとした具体的延長としての拡がりが、我々の知覚内容でもあるとするのは奇異に思えるかもしない。しかし後述のように、一定の条件下ではベルクソンにとっては物質の

存在とその知覚とは全体と部分の関係にあり、両者の間には程度の差異しかないとそれがゆえに、拡がりは物質の本性であるとともに知覚内容の性質であるという言い方が許されるのである。

先に触れたように、「拡がり」という術語そのものが登場するのには『記憶』が最初なのだが、具体的延長と等質空間との区別はすでに『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』)の中でも「延長の知覚と空間の概念とを区別しなければならないだらう」(D. I., 71)として強調されている。それなりの論点は『創造的進化』(以下『進化』)に至っても変わらないとはない。

「」の種の場〔=空間〕はけつして知覚されない。それは概念われるだけなのだ。知覚されるもの、それは色彩を帯びた、抵抗のある、実在的物体ないしその要素的な実在的部分の輪郭が描く線に従つて分割された、延長なのである。(E. C., 157) □ 内は引用者、以ト同。)

こうして等質空間と具体的知覚ないしは具体的延長としての拡がりとの区別は、ベルクソンの基本思想の一つに数え上げられるのである。ベルクソンはたんに持続と空間とを区別しただけではない。のうちに与えられたものなのである。言い換えれば、具体的延長とは知覚に与えられた内容のことであり、「感覚性質の多様」(M. M., 244)に他ならない。「拡がりは知覚の最も明白な性質である」(M. M., 276)。物質の本性であるとした具体的延長としての拡がりが、不可分であり、具体的に与えられているという点で空間よりは持続に近いものなのである。

「」のよつた質を伴なつた「拡がり」を本性とする物質を、等質空間と混同するところから心身問題の困難が生ずるとするのがベルクソンの一つの論点である。物質の本性は等質な延長ではない。彼によると、等質空間は認識ではなく行動のために悟性が生み出した道具ないし図式なのである。それゆえ、等質空間は物質の本性に属するのではなく、物質の使用にかかるのである。このような行動の図式としての等質空間によらない外界の表象の可能性を、ベルクソンは動物のうちに見ている。「空間は、動物にとっては我々と同じように等質的なのではない」(D. I., 72)。動物が表象する空間は「純粹に幾何学的な図式」ではなく「各方位はその固有のニュアンス、質を伴なつて現われる」(ibid.)。動物は等質空間の表象を持ちえないといわれているのだが、」の論点も『進化』に至るまで変らない。⁽²⁾「動物は我々と同じく延長した事物を知覚するとしても、恐らく[等質空間についての]こかなる観念も持たない」(E. C., 158)。

こうして、等質空間の表象を持つことができるのは、人間だけであるとされる。⁽³⁾この表象の獲得とともに、人間が外界へ働きかけ、それを改変する能力は飛躍的に高まる。しかし、それはまさに「働きかけ」すなわち事物の利用や技術的効用に属する事柄であり、事物の本性の探究に属する事柄ではないのだ。「等質空間は我々の行動に關わるものであり、ただ我々の行動に關わるにすぎない」(M. M., 260)。」のようにベルクソンはカントと共に「等質空間は、もはや図式あるいは記号の実在性以外には実在性を持たない」(ibid., 247)として空間をその内容から分離したのだが、しかしその反面カント

と異なり、等質空間を認識の制約とはせずに行動の図式だとしたのである。事物に有効に働きかけ思いのままに操るためには、それを任意に分割できなければならない。この任意な可分性の図式、無限可分性の図式が等質空間なのである。ところが、事物に働きかけそれを利用するための行動の図式にすぎないものを、我々は事物の本性であると錯覚してしまう。ここから、等質でしかも無限に分割しうる延長という物質の捉え方が生まれてくる。しかし、物質をこのように把握すると、仮定によりそれは質を欠いているのだから、我々が知覚するような事物の諸性質は我々の精神が物質に付け加えたものであることになるだろう。錯覚などの経験的事実も、この仮説を支持しているように見える。ところが精神は物質と本性を異にするがゆえに、純粹な非延長とされるのだから、等質的延長としての物質と非延長的な諸性質の間には共通なものは何も見出せなくなってしまう。これを救済するには予定調和にでも頼る他ないだろうが、これは明らかに問題の回避である。こうして、物質の存在と物質の知覚、身体と精神の関係は理解不能におちいるだろう、とベルクソンは言うのである。

問題の発端は明らかに、物質の存在を等質空間と混同したところにある。物質の存在は等質的ではなく異質的な延長、すなわち「拡がり」なのである。この点で、ベルクソンは物質の存在を物質についての我々の知覚に近づけたと言うことができる。後述するように、記憶力の寄与分をのぞいた極限状態の知覚である「純粹知覚」は物質界に対して部分と全体の関係にあり、両者の間には本性の差異で

はなく、程度の差異しかないとされるのである。したがってベルクソンは「拡張」という考え方によつて物質と知覚を接近させ、心身関係を説明しようとする。しかし、この考え方の十全な発展を見届けるには、さらに「拡張の程度」を検討しなければならない。

「拡張の程度」という考え方は、ベルクソンの心身関係論において要になる思想であるにもかかわらず、「記憶」ではわずかにしか言及されていない。同書の末尾近くで、我々の精神は「観念からイメージへ、イメージから感覚へと漸進的に移行」(M.M., 247)、その」とよつて「活動性へ、従つて行動へと進展するにつれて拡張へと近づく」(ibid.)が、この拡張はどこまでも異質的で不可分なのだから心的状態とはいがなる意味でも不調和を来たさない、と述べられているに止まるのである。『記憶』では『試論』でも述べられていた具体的延長としての拡張、すなわち「分かたれる延長と純粹な非延長の中間にある何ものか」(ibid., 276)である拡張が前面に押し出されており、「拡張の程度」についての記述は乏しい。この考え方の充分な展開は、次の『進化』を待たねばならない。

『進化』においては「拡張の程度」が、精神の弛緩の様々な程度と同一視されて論じられている。『記憶』では緊張と弛緩は拡張とは一應別仕立てで叙述させていたのだが、この場合は同一の事態を異なる術語で表わすものとされるのである。ベルクソンが緊張と呼ぶのは我々が行動している時に経験される精神の状態であり、行動が自由になり創造的になればなるほど、緊張の度は増すとされる。

反対に、我々が行動から身を引き離し夢想の状態に陥るとき、我々の精神は弛緩しているのだと語られる。つまり、我々の精神にはまだ自由行為の際の緊張と、完全な夢想状態の際の弛緩といふ二つの仮想上の極限の間に、高低さまざまな度合が存在する」となる。『進化』では、この弛緩の方向に踏み出すことが同時に拡張の方向へ、さらにはその果てにある空間の表象へと向うことでもあると主張されるのである。

「行動するかわりに夢見るにまかせてみよう。同時に我々の自我は分散してしまう。我々の過去はそれまでは不可分の推進力のうちに凝集し、それを我々に伝えていたのに、たがいに外在する幾千もの記憶内容に分解してしまう。(...) 我々の人格はこうして空間の方向へと降つてしまふ。さらに感覚において我々の人格は絶えず空間と相並んで歩む。」(E.C., 202-203)

「精神は時折おこる自らの弛緩、すなわち可能的な拡張から得た感情そのもののうわに、この空間の暗黙の表象を持っていたのである。」(ibid., 203)

すでに見たように、拡張とはベルクソンにとっては物質の本性であるのだから、拡張—弛緩の方向へ踏み出す」とは、まだ物的なものに近づくということでもある。彼によれば、心的 existence は緊張の方向に、物的 existence は弛緩—拡張の方向に傾く傾向である。緊張の逆転としての弛緩—拡張の方向の延長上に見出されるのが、物的存在なのである。「物的なものは心的なもののたんなる逆転にすぎない」(E.C., 203)。ここで物質あるいは物的なものと称されて

いやらのは、あらん個々の物体ではなく、物質の全体すなわち物質界である。『記憶』の第一章では物質界は「イメージの総体」として捉えられ、物質も全体として見れば「全てが平衡し、相補い合」、中和し合つて「意識のようなもの」(M.M., 246-247) とやれでいる。すでに触れたように、ベルクソンは物質と我々の知覚とを接近させている。緊張の逆転、中和化された意識という捉え方が示すように、物質の存在は心的なものと無縁なものではないのである。しかし、ベルクソンにとって実在を構成するのはいままでであつて、等質空間は知性の生み出した図式であるとされる。

我々の知性は弛緩—拡張の方向へ一度踏み出すと止まる」とを知らない。知性がこの運動の果てに物質をいわば通り越して到達する図式が、等質空間であるとされる。知性はこの無限可分性の図式をいつたん所有すると、これを利用して本来不可分であるはずの物質を、みずからの必要に応じて思いのままに分割できるようになる。この無限可分性の図式である等質空間と、異質的で不可分な拡張である物質との混同が心身関係を理解不可能としてしまつ、と『記憶』に述べられていることはすでに指摘した通りである。このように『進化』では精神、物質、空間は、緊張ないしは弛緩—拡張の様々な程度に対応するものとして統一的に把握されるに至るのである。

以上、具体的延長としての拡張と拡張の様々な程度について、ベルクソンの三著に現われた叙述を概観してきた。問題は最初に述べたように、「拡張の程度」という考え方の内実を問うことである。

つた。それは『進化』ではいま見たように「弛緩の様々な程度」として捉えられている。そして弛緩の各程度は精神、物質、空間といったものに対応している。我々がときおり経験する精神の弛緩は、これの三者に対応する弛緩のほんの一部にすぎないのであるが、しかしたんに「精神の弛緩」と言い換えただけでは、その内容は依然として明らかにならない。我々の考えではそれは行動の観点から捉え直す時、明確な姿を現わすに至るのである。

一

拡張に程度があるとはどういふことなのだろうか。この節の基本方針は、拡張という術語から空間性にかかる意義をいつたん取り去り、『進化』の叙述に従つてこれを弛緩と同一視し、しかも行動の観点から眺め直すという行き方である。

『進化』では弛緩 *détente* へ拡張 *extension* は、ともに緊張 *tension* の逆転として同一の事態の異なる呼称であるといれていた。そこで精神の緊張—弛緩として表現されている事態を、日常語から連想に止まらず正確に特定しなければならない。すぐに見て取れるのは、ベルクソンにおいてはこれらの術語が精神の状態を表現するに同時に、行動の様態をも表現している点である。例えば、緊張について次のように述べられている。

(...) 我々は意志のバネが極限にまで緊張するのを感じる。我々は自らの人格の激しい自己収縮によって、逃れ去る過去を取り

集め凝縮し不可分にして、現在のうちへと前進せなければならぬ。」¹¹ して過去は現在のうちに取り入れられる」とによつて現在を創造する。我々が自己そのものを、この点に至るまで取り戻す瞬間は非常に稀れである。それは我々の真に自由な行動と一つのものでしかない。そしてその時でさえ、我々は完全に緊張しているわけでは決してない」(E. C., 201)

ここでは精神が緊張の方向に向かえば向かう程、行為はそれだけいつそう自由なものになる、と語られている。そして完全に自由な行為とはたんに仮想された極限である以上、完全な緊張も我々人間にあつては決して実現されない。行動の観点から捉える時、緊張とは自由な行為に他ならないと言える。

とすれば、逆に弛緩の方向に踏み出す時、我々の行動が惰性的なものへとおちいつて行くであろうことは容易に想像される。精神の緊張を緩めるにつれて、行動は次第に自動的で反射的なものに近づいて行くだろう。」の弛緩—拡がりへの方向を仮想的に進めた先に見出されるのは、完全に惰性的な振舞いをする物質の存在である。結局、弛緩—拡がりに向うとは、我々の身体が周囲のイメージ（物体）と同じく自らがこうむる作用に比例した反作用を投げ返すだけの惰性的存在に近づいて行くことなのだ、と解釈することができるのである。そこでは緊張の場合とは逆に、過去は現在のうちへと送り込まれず、したがつて過去の経験に基いた未来の行動の「選択」も待機もなされなくなる。こうして我々の身体は、周囲の刺激を無差別に受け取つては送り返すだけの惰性的なイメージにます

ます接近するだらう。」¹² の「選択」こそ『記憶』の第一章で述べられていたよつて (M.M., 35)、「ベルクソンにとって精神と呼びうるもの最初の崩しに他ならない。行動する存在とは、また選択する存在もある。彼は「意識とは選択の同義語である」(E.S., 11) とさえ言つ。」¹³ のように、物質界とは自然法則に従つて他のあらゆるイメージと連帶し作用し合つ「イメージの総体」なのだから、弛緩—拡がりへと向うにつれて我々の存在は物質界の「だんなる」イメージへと埋没して行くのだ、とも言えるであらう。そのとき身体は「不確定の中心」であることをやめ、必然的法則に支配された連関の中に組み込まれることになる。

以上のように、「拡がりの程度」とは行動の様々な様態を指すものであると解釈される。我々の行動 action は物体の振舞いとあまり変わらないものから日常のなつか惰性的な習慣的行動をへて、真の自由行為に至るまで無数の段階を持つてゐる。精神が緊張の方向へ向うとはこの階梯を自由行為の方へと登つて行くことであり、弛緩へ向うとは惰性的作用 action へと降つて行くことであると考えられるのである。

さて、」¹⁴ 次の節に移る前に、ありうる疑問をひとつ解いておかなければならぬ。ベルクソンは「拡がりの様々な程度」によつて心身関係を説明しようとするのだが、これは彼によつて「本性の差異 difference de nature」があるとされていた精神と身体（ないしは

物質)との関係を、單なる「程度の差異 *difference de degrés*」しかないものとして捉えることになりはしないだらうか。「記憶」では「本性の差異」と「程度の差異」という対比が頻出する。脳の知覚機能と脊隨の反射機能との間、イメージの存在とイメージの知覚との間にはたんなる程度の差異しかないとされる。前二者の間にはたんなる複雑さの違い、後二者の間には全体と部分の関係しかないからである。これに對して、外的知覚と痛みなどの感情感覚との間、記憶内容 *souvenir* と知覚との間、記憶力 *mémoire* と脳の機能との間には本性の差異があるとされる。この最後の対比、すなわち記憶力（精神）と脳（身体）の間には本性の差異があるといふ主張は、拡がりの様々な程度によつて精神と身体を統合するという主張と矛盾するのではないだらうか。ベルクソンは、身体と精神の区別を延長対非延長の因式で考える空間的区別に代えるに時間的区別をもつてし、時間的区別は「程度を容れる」ものであると言つ。この主張は、記憶力と脳の間に彼が設けた本性の差異を反古にしてしまうのではないだらうか。「本性の差異」と「程度の差異」との峻別はベルクソンがとりわけ強調するところであり、一方の関係を他方のそれと取り違えるところから多くの哲学的難問（あるいは偽似問題）が生じるとされている。ところが今やベルクソン自身が二つの差異の混同におちいつているように見えるのである。

この問題に関してはドゥルーズの指摘が示唆に富んでいる。⁽⁴⁾ 程度の差異は差異の程度ではない、と彼は強調する。拡がり（弛緩）あるいは緊張には様々な程度があるのだが、これら諸々の程度の間に

あるのはたんなる程度の差異ではないのだ。拡がりの程度の間にあるのは本性の差異である。偽似問題が生じるのは、これら拡がりの程度の間にたんなる程度の差異をしか見ないからなのである。

「なるほどベルクソンは程度に立ち還るが、程度の差異に立ち戻るのではない。存在のうちには程度の差異はないが、差異そのものの程度がある、というのが彼の考え方の全てなのだ。」

ドゥルーズは、拡がり（あるいは緊張）の諸々の程度の間にたんなる程度の差異を見てはならないことを教えてくれる。拡がりの程度とは光のスペクトルのようなものであろう。各々の色の間にはたんなる程度の差異ではなく質的な差異があるが、ある色から次の色へは漸進的な移行が可能である。それゆえ、拡がりの程度とは行動の様々な様態であるとする本稿の立場からすれば、行動の各様態間にもたんなる程度の差異ではなく質的な差異がなければならないだらう。事態がまさにその通りであることを次節では示すつもりである。しかし、さしあたっての課題は拡がりの二側面、すなわち具体的延長としての拡がりと拡がりの様々な程度とを統一的に把握することである。

三

拡がりの様々な程度とは行動の様々な様態に他ならない、と先に述べた。しかしこのように解釈すると、二種類の「拡がり」があることになりはしないだらうか。すなわち具体的延長としての拡がり

と行動の様々な様態としての拡がりである。「見する」、「11」の拡がりの間に関係はないように見える。一方は物質の存在ないし我々の具体的な知覚内容に関わるものであり、もう一方は我々の行動に関わるものであるからだ。そうすると、ベルクソンが extension という一語で表現したものに「義を区別しなければならない」といふことになるのだろうか。

これはいかにも不自然な考え方である。しかし、『記憶』第一章で展開されたベルクソンの知覚論からいま一度「拡がり」という考え方を眺め直すとき、右のような見かけの一義は統一されてしまう。このことを本節で示そうと思う。ただし、本論はベルクソンの知覚論を主題とするものではないので、以下の課題にかかる限りで概観するにとどめる。

知覚を行動の観点から捉えようとするといつれがベルクソンの

知覚論の、まず第一に挙げなければならない特徴であろう。知覚は事物を認識するためではなく、我々が事物に働きかけ利用するためにある。ひとことで言えば、知覚は行動を導くのである。ベルクソンは、知覚を知識の基礎として捉えるような思弁的な見方を、事物の使用にかかる行動の観点に移行させるのである。ベルクソンがその知覚論を構成するに当つてまず出発するのは、「イマージュの総体」からである。既述のように、イマージュの総体とは物質界とふつう呼ばれているもの、すなわち我々の知覚から独立にそれ自身で存在し、自然法則に従つて相互に作用し合う事物の総体とほぼ同意である。異なるのはこのイマージュの総体が、「出現しよう」とす

るまことにその瞬間に相殺されてしまふ」(M.M., 279) 意識として把握されている点なのである。イマージュの総体あるいは物質界は、自然法則に従つて、厳密に受けただけの作用に対しても反作用を投げ返す場であり、ここには不確定性の入り込む余地はない。ある物体の任意の時刻の振舞いは、もし条件が全て知られているなら、計算可能なものとして正確に予見されるだろう。今このイマージュの総体のうちに生体と呼ばれるものが出現したならば、不確定の要素が持ち込まれることになる。なぜなら生体は惰性的なイマージュとは異なり、周囲のイマージュから被る可能的な作用の中からみずから利害にかかる作用だけを選び出すこと、また反射的な応答をせずに行動を延期することができるからである。つまり、生体の出現に伴なつて、イマージュの総体のうちに選択および待機という不確定の要素が導入されることになるのである。

さてベルクソンは、この不確定性から意識的知覚の出現を説明しようとする。そのため彼は意識的知覚の諸条件を単純化し、現実の知覚から記憶の寄与分を取り除いた「純粹知覚」という事実上よりも権利上存在する知覚を想定する。このように単純化された条件のもとで、イマージュの存在からイマージュの表象を導出するには、それが我々に及ぼす全作用の中から我々の利害にかかる作用だけを選択すればよいのだ、と彼は言う。この選択によって、生体が外的対象から受ける作用はそれだけ減少する。「それらの作用のこの減少こそ、まさしくそれらについて我々が持つ表象なのである」(M. M., 34)。つまり表象とは存在に何ものかを付け加えたものではな

く、反対に存在の幾分かを減少させたものなのだ。ところで、我々の利害にかかる側面とは、我々が影響を及ぼしうる側面でもある。この意味で、事物の可能的作用の選択とは、我々の可能的行動の選択に他ならない。現実的行動が唯一の可能な行動である際には選択の余地はない。しかし可能的行動がいくつか示唆されている場合は、その中から選択をすることができる。可能的行動は我々の利害にかかる事物の側面を示唆し、この側面は逆に事物に対する可能的行動を我々に示唆するだろう。だから知覚は事物を写した写真のようなものではなく、むしろ絶えざる問い合わせと応答からなる回路あるいは反射になぞらえるべきなのである。「それゆえ、これらの対象は私の身体のありうる影響を私の身体に投げ返すのである。（…）私の身体を取り巻く対象は、それらに対する私の身体の可能的行動を反射する」（M.M., 15-16）。このような可能的行動の選択あるいは同じことだが事物の可能的作用の選択こそ、意識的知覚の本質であるとベルクソンは考えた。この観点からイマージュの総体すなわち物質界を振り返る時、それは表象が生まれ出ようとする瞬間に相殺され中和されてしまう潜在的知覚であることがわかる。知覚（表象）を生み出すことなどできない。それはイマージュの総体として最初から、ただし潜在的な形で与えられているのである。我々はそれを現実化させるだけなのだ。こうしてイマージュの存在とその知覚とは全体と部分の関係にあり、両者の間には程度の差異しかないとされる。純粹知覚においては精神は事物の一部を成し、物質と直接的に接觸すると語られるやうである。

以上がベルクソンの知覚論の概略である。ひとことで言えば、彼にとって知覚とは外的対象から我々の利害に關わる作用を選択すること、言い換れば外的対象に対する我々の可能的行動の反射である。最初に触れたように、知覚は行動と不可分であるとした点が、彼の知覚論の眼目である。

さて、このような知覚の捉え方から拡がりの二義を振り返るならば、それらは一つに収斂してしまうことが分るだろう。なぜなら、拡がりとはまず等質空間と区別される具体的延長ないしは具体的知覚であったのだが、それはいま見たように、事物に対する我々の可能的行動を通じて我々に与えられるものであるからだ。一方で拡がりの程度とは行動の様々な様態であると先に解釈したのだから、具体的知覚としての拡がりと拡がりの程度とは行動の観点から眺めるとき、統一的に把握されるに至るのである。もとよりこれは知覚とは行動であるということではない。知覚そのものは既述のように、イマージュの総体として潜在的な形ではじめから与えられている。この言わば潜在的知覚が我々の知覚となるのは、事物に対する我々の可能的行動を通じてなのだ。この意味で、行動する存在のみが意識的知覚を享受することができる、と言えるだろう。

ところでベルクソンはその知覚論において、可能的行動と現実行動という区別をさかんに用いている。次にこの区別を手掛りに、これまで一括して「行動の様態」と呼んできたものの内実を探つてみることにしたい。

弛緩—拡がりに向うとき、我々は「夢想の状態」におちいるとき

れていた(11ページ参照)。行動に着目する時、この夢想状態とはどのような状態なのだろうか。睡眠中文字通り夢を見ている時のように、行動の停止状態にあることはすぐに見て取れる。しかし夢想の状態は、たんに現実的行動の不在によって特徴づけられるわけではない。より重要なのは、可能的行動も閉ざされているという点なのである。弛緩—拡張へ向うとは物質の状態に近づくことであるとされていた。物質の振舞いは選択の欠如によって特徴づけられるが、選択の欠如とは可能的行動の不在をも意味する。それゆえ、弛緩—拡張によつておちいる夢想の状態は可能的行動の不在によって特徴づけられるのである。⁽⁶⁾この論点は、外面向的には夢想状態と同じく現実的行動を欠いている次の状態を思い浮かべれば、より明確になるだろう。何か重大な決断をするために集中している時、我々の脳裡には複数の選択肢が相拮抗している。可能的行動は我々の前にあるのだが、いずれも等しい力で己れを主張し、いわば平衡状態にあると言える。このとき意識は緊張の極にあるだろう。夢想の状態とこのような決断のために張りつめた思索とが対極に位置するという事実は、現実的行動の有無からではなくならない。両者を正反対の方向に位置づけるのは、可能的行動の有無なのである。可能的行動という概念が行動の様態を区別するために有効であることは、弛緩のもう一つの例として挙げられている夢遊状態を考察することによってさらに明確になるだろう(E.C., 145)。夢遊状態を含む自動症においては、患者はある程度まとまりを持った現実的行動を展開するのだが、意識はなくその間の記憶も残らない。我々の身体はこの

ときほとんど自動機械と選ぶところがないものとなり、弛緩の現実的極限にあると言える。そしてこの自動症を夢想状態と共に弛緩の方に位置づけ、決断に際しての緊張と位置させるのは、前者は可能的行動をすなわち選択を欠いているという事実なのである。自動症は極端な事例であるが、我々が機械的に習慣的行動を営む場合にはこれに近い状態に置かれる。歩くこと、箸を使うこと、本のページをめくること、さらには通い慣れた道を往復することさえ、我々はほとんどそれと意識せずに、またそうであればこそやってのける。習慣的な一連の行動は自動的にまた機械的に繰り広げられるものであり、ここでも選択や決断の、従つて現実になされる行動以外の可能的行動の介入する余地はほとんどないのである。可能的行動の出現に伴なつて意識が、従つて意識的知覚が登場する。このことはたとえば新しい行為を習得しようとしている場合などから推察されるだろう(E.S., 11)。そこでは事態は習慣的行動とは全く逆の様相を呈していく。我々は習得しようとする行為とみずから身体運動とを絶えず比較し、みずから動きを修正しつつなすべき運動を選択し決定しなければならない。このときみずからの行為に対する我々の意識は目覚め、意識的知覚が伴なうことになる。さらに今まで経験したことのないような状況に直面し、何らかの決断を下して行動を取らねばならないとき、意識はいつそう覚醒し緊張する。このような状況から生まれる行為が自由な行為であると言える。

こうして夢想状態や自動症や反射行動を現実の極限とし(仮想される極限は物質の状態である)、習慣的行動を経て自由行為へと至

る行動の様々な様態は、可能的行動の有無とその強度から理解されるのである。そうであるならば、夢想状態等と習慣的行動との間、習慣的行動と意識的で自由な行為との間に、たんに程度の差異ではなく質的な差異があることは容易に了解されるだろう。意識的行為とそれ以外の行動とは可能的行動の有無という点で決定的に異なる。また意識の緊張が増すということは、たんに行為者に開かれている可能的行動の数が増大するということではなく、その質や強度に関わることだらうからである。現実的行動が可能的行動を伴なうとき、はじめてそれを「行為」と呼ぶことができる。行為とは、可能的行動を自らの回りに量のよう従えている現実的行動であると言えよう。さらには意識的知覚の出現も可能的行動の登場と時を同じくする。ベルクソンは意識を常に選択によつて基礎づけた。彼にとって「意識とは選択の同義語」(E.S. II)であり、それはまた「潜在的活動と現実的活動との引き算として定義される」(E.C., 145)のである。我々の可能的行動の及ぶ範囲は知覚の及ぶ範囲である。この意味で拡がりとは、事物に対する可能的行動の拡がりであるとも言えるだろう。ここに至つて、可能的行動あるいは選択という概念によつて意識的知覚と行動の様々な様態とが結びつけられ、「拡がり」の統一的理説が得られたと結論できるのである。

拡がりの様々な程度とは行動の様々な様態のことであり、具体的

る延長としての拡がりは可能的行動の（同じことだが事物の可能的作用の）選択によつてイマージュの総体から裁断され、我々に与えられる。

最後にこうした解釈に対し予想される反論を検討しておこう。本論では、ベルクソンの拡がりを首尾一貫して行動の側面から捉えようとしてきた。しかし、ベルクソンこそは行動のために作られた様々な枠組を批判し、行動に動機つけられ有用性を目指す思考法から脱却して行動の観点から認識の観点へと移行することによって、「眞の現在」を把握することが可能になると主張し続けた哲学者であったのではないか。行動と行動の道具である諸々の概念とは、彼にとっては眞の認識の妨げであり除去すべき邪魔物でしかなかつただろう。このことを典型的に示しているのが、すでに述べた行動の図式としての等質空間である。この任意な無限可分性の図式が本来は不可分である物質に適用される結果、物質が無限に分割しうる等質的延長であるといふ錯覚を生み、それとともに行動の要求に従つた作為的分割が独立な諸物体を生み出す。ここからゼノンの背理や心身問題の困難が生まれるとするのが彼の論点であった (M.M., 235-236)。とすれば、彼がまさにその心身関係の説明原理として導入した拡がりを、行動の観点から把握しようとする本論の解釈は倒錯もはなはだしいのではないだろうか。

しかしこの反論は当らない。行動とは功利的行動だけではないからだ。たしかにベルクソンは、行動のための原理が認識の領域を侵犯することを常に警戒し批判した。だが彼が批判したのは功利的な

あるいは実用的な行動のための原理に限られる。一方で彼は、創造的なあるいは自由な行為をきわめて重視していたのである。そのことは、彼が行動を精神と身体の統一の存在理由であるとみなしているという一事をもつてしても明らかであろう。⁽³⁾したがって拡張りを行動の観点から捉えようとする本論の試みは、彼の哲学と何ら抵触するものではない。ベルクソン哲学は、「一面では行為の哲学であると言えるほどなのだ」⁽⁴⁾。

とはいえて問題が残らないわけではない。一方に功利的行動、他方に創造的行為という二分法だけでは明らかに不十分であり、両者の関係を探る必要があるからだ。本論ではこの関係を明示するにまで至らなかつたが、創造的なもしくは自由な行為が固定化され、いわば沈没したもののがベルクソンが批判したような功利的行動の一つの側面であるだらうとは言つて置きたい。習慣的な創造行為とは形容矛盾だらう。またベルクソンは等質空間という網の目によつて、事物を裁断し利用する営みを功利的であるとするが、そのような方法によつて多くの創造的な技術的成果が生み出されているのも事実である。等質空間の表象をもとにした行動が功利的で、そうではない行為は創造的だという単純な二分法は実情に合わないだらう。この点で、ベルクソン哲学における等質空間という概念の位置づけを明確にすることが、今後の課題として残されている。さらに、行動に着目して「拡張り」を捉えるといふ本論の試みが正当化されるにしても、「拡張り」の意義がそれに尽きるものであるかどうかには疑問が残る。たとえば「選択」を取つてみても、それが可能であるた

めには可能的行動を表象し、その中から選択を行なう主体を必要とするのではないだらうか。ベルクソンがそう考えていたらしいことは、神経組織の発達に伴なう生体の行動範囲の拡大の背後に、意識の緊張の増大を見なければならない(M. M., 280)としている点からもうかがえる。行動は、その名に値しない惰性的状態から習慣的行動をへて自由行為に至るまで、無数の段階を持つてゐる。その背後に实体としての心を想定するか否かは、この小論の範囲を越えた問題である。これに関連することだが、ベルクソンの「拡張り」はもともと心身関係の説明のために導入されたのだが、それを行動の観点から解釈することによつて心身関係になんらかの光を当てることができたのだらうか。非常に高度な精神的働き、たとえば論理的思考などもこの観点だけで押し切ることができるとどうかは未知数である。しかし、心一身のまさに接点となるところ、すなわち最も低度の精神と惰性的物質とが接するところに關してはベルクソンの説明はうまく行つていると言える。繰り返すまでもないが、純粹知覚において潜在的意識としてのイメージの総体から意識が出現するのは、選択なし可能的行動の登場と同時であるとされていたのであつた。

総じて、行動の様々な様態の背後に意識の緊張、過去・現在・未來の記憶力による総合、生活への注意などの働きをになう心的なものをいかなる形で認めるにせよ、これらの働きが顕在化されたその意味が読み取られるのは、やはり行動を通じてであると言えるだらう。この小論の目的は最もベルクソン的な考え方の一つである

「拡がり」とは何かを行動の側面から解明やべるんだやあひだが、直観、持続、記憶等のマルクソン哲學の中心に位置する他の術語が、同じく行動を通じて分析する時とのよろな姿を現わすに至るかは今後の探究に委ねなければならん。

市田謙助著『心の構造』。

- (D. I.) *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889,
120^e édition, P. U. F., 1967.
- (M. M.) *Matière et mémoire*, 1896, 92^e édition, P. U. F., 1968.
- (E. C.) *L'Évolution créatrice*, 1907, 142^e édition, P. U. F., 1969.
- (E. S.) *L'Énergie spirituelle*, 1919, 160^e édition, P. U. F., 1976.

附

- (一) 長谷川 *indivisible* よしべ語は注意を要する。いわば用語としてはそれから不適切だ。たゞも少額しうなふらふらなどではなく、少額にまつてやの性質を察化せんやうがいふ意味ある。次を参照。
- G. Deleuze, *Le Bergsonisme*, P. U. F., 1968, 2^e édition, pp. 35-36.
- (二) いよいよマルクソンは動物の驚くやうな方向感覚を説明するべく(D. I., 71-72)。
- (三) かかる人間によるもの自然な区別によく形で、等質空間によるもの空間表象が残存してゐる(同上)。
- (四) G. Deleuze, 'La Conception de la différence chez Bergson' (*L'Etude bergsonienne*, vol. IV, P. U. F., 1956) c. P. Deleuze, op. cit., pp. 92-95.
- (五) ibid., p. 109.
- (六) いよいよ精神の状態は物質の状態に近づくのみならぬ。次を参照。Deleuze, op. cit., p. 88 n (3).

(七) 例えれば「最初の運動の中に最後の運動がすでに前もって形成される」(E. C., 145) 仕方で繰り広げられる。

(八) M. M., 248.

(九) 同じくマルクソン哲学における行為の重要性を強調した論稿に次のやのがある。
川嶋 正「形而上学と行為」——マルクソン哲学の一問題点——(坂田徳男、澤瀉久敬共編『マルクソン研究』勁草書房、一九六一年、所収)